

新規選定 多種多様な建築物が建ち並ぶ製織業で栄えた町並み

桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区

所在地 桐生市本町一丁目及び本町二丁目の全域並びに天神町一丁目の一部

面積 約13.4ヘクタール

桐生市は群馬県の東端中央部に位置し、市域はみどり市を挟み東西2つの区域からなる。観応元年(1350)、桐生氏は桐生川をさかのぼった谷部に柄杓山城を築き、その後、徳川家康の領地となり、当時の久方村と荒戸村の一部が開拓され、新たな町が建設されたとされる。町立てにあたっては久方村にあった天満宮が現在地に遷され、その南に一丁目から六丁目で構成される町が形成され、この町は桐生新町と呼ばれ、それ以降、桐生の町はこの町筋を中心に発展した。

桐生の経済を支えたのは織物業であり、正保3年(1646)に織物を換金するための市が天満宮に立つようになり、その後、六町内で市が開かれるようになった。近代に入り絹綿織子が桐生を代表する織物となり、大正期から昭和初期に最盛期を迎える。

保存地区は、東西約260メートル、南北約820メートル、面積約13.4ヘクタールの範囲であり、天満宮と一丁目と二丁目に当たる。

敷地の構成は、通りに面して建物もしくは塀を建てる。通りに面する建物は店舗専用の建築、店舗付住宅に加え、事務所建築も見られる。さらに、借家として長屋が建てられる場合もある。このように通りに面して様々な種別の建築が建ち並ぶことが、町並みの特徴のひとつである。敷地は通りに直行しないため、建築物の壁面線が雁行することも特徴である。伝統的な町家建築に加え、近代以降の事務所建築や洋風建築も見られる。蔵は、土蔵造が伝統的な形式であるが、近代以降に石造、煉瓦造、鉄筋コンクリート造のものもあり、大正期から昭和初期にかけては、ノコギリ屋根の工場が建てられ、近代になっても織物業で繁栄した歴史を伝えている。

桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区は、近世初頭に形成された町並みを良く残し、特徴ある敷地利用形態をもち、主として近代以降の多種多様な伝統的建造物が色濃く残り、製織町として発展した歴史的風致を良く残し、我が国にとって価値が高い。



本町通りの町並み



大谷石によるノコギリ屋根工場



桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区の範囲